

niponica

Discovering
Japan

にほにか

no. 38



• 特集 •

日本人と宇宙



上／2024年に打ち上げられた、H3
ロケット試験機2号機（©JAXA）
表紙／長野県白馬村にある野平の一
本桜と夜空（写真＝Aflo）

・特集・

日本人と宇宙

古来、頭上に広がる世界に思いを馳せてきた日本人。

宇宙開発のみならず、物語、芸術、

エンターテインメントにまでおよぶ日本の宇宙文化をひもとく。

contents

04 日本で宇宙を感じる

08 日本人の宇宙観

10 宇宙に貢献する日本の技術

12 宇宙をつくる人びと

14 宇宙アニメが好き！

16 にっぽん地図めぐり
日本各地の宇宙スポット

18 召し上がれ、日本
宇宙日本食

20 街歩きにっぽん
種子島

24 ニッポンみやげ
宇宙文具

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん（nippon）」をもとに名づけられた「にぽにか（niponica）」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、ポルトガル語、中国語、ロシア語、アラビア語の全8か国語版で刊行されています。

no.38 R-070523

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
<https://www.mofa.go.jp/>

にほん　う　ちゅう　かん 日本で宇宙を感じる

たいよう　つき　ほし　ひかり　あが　ふうけい　び　じゅつ　に　ほん　じん
太陽や月、星の光を崇め、風景や美術のなかにその美を写してきた日本人。
そ　う　だ　い　う　ちゅう　し　ぜん　ちゅう　わ　び　やう　げん
壮大な宇宙は、自然との調和のなかで表現されてきた。

富士山に降り注ぐ流星群 (写真=PIXTA)



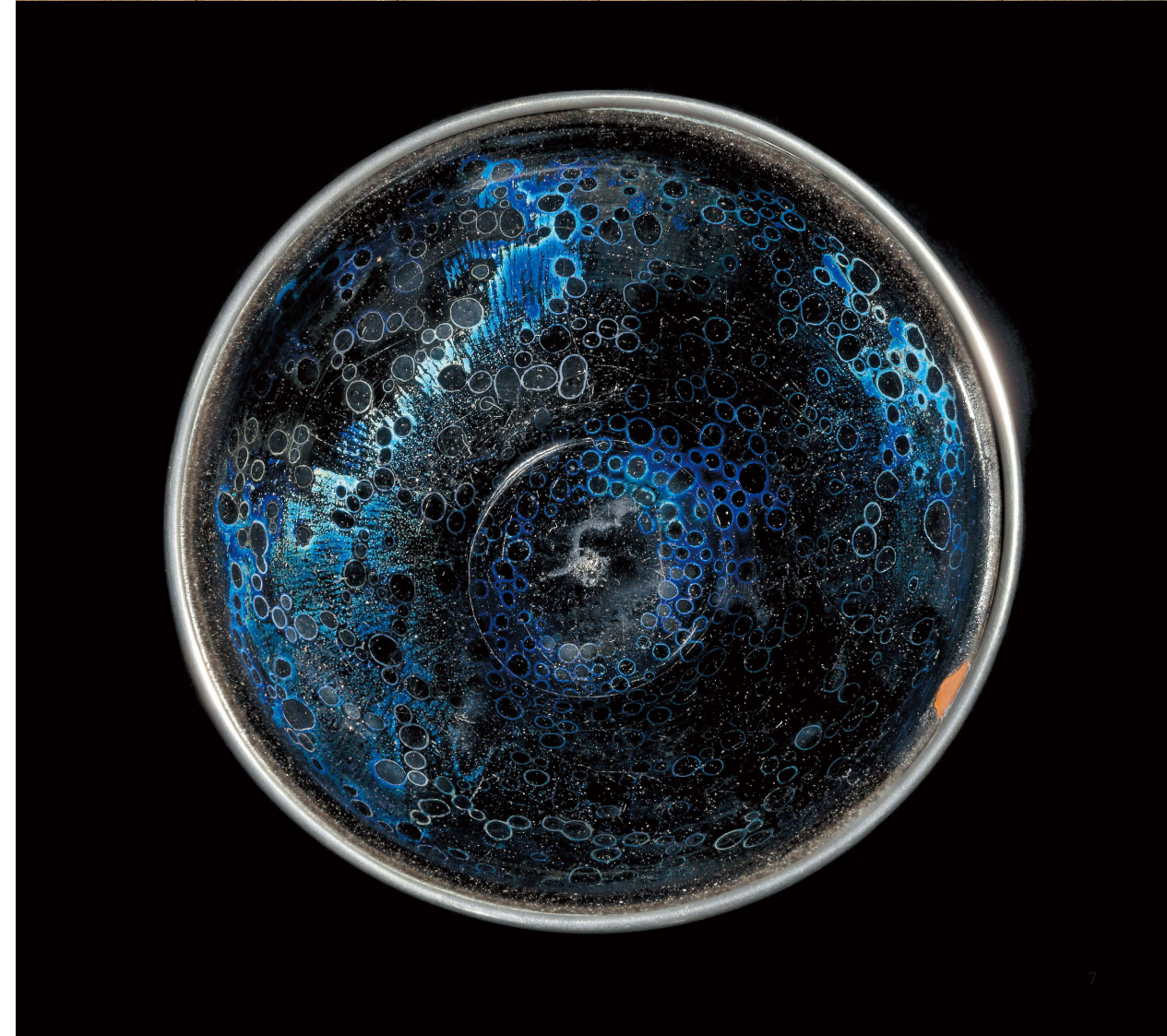
左ページ上／北海道初山別村の金比羅神社の上空に広がる満天の夜空（写真＝PIXTA）

右／月と太陽を配し、秋草とともに描く。古くから画題として好まれた。江戸（東京）西部の武蔵野の原野を表現した作品のひとつ。「日月秋草図屏風」（所蔵＝藤田美術館）



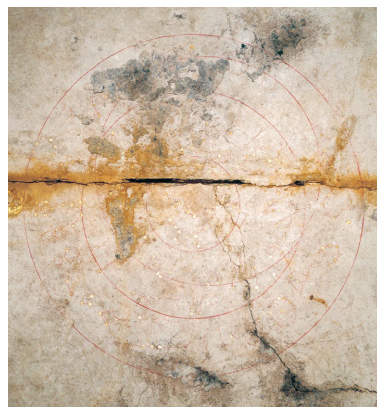
左ページ下／三重県伊勢市の二見浦にある夫婦岩の間から昇る日の出（写真＝Adobe Stock）

右／12～13世紀頃に作られたとされる、世界でもわずか3件しか現存しない国宝「曜変天目茶碗」。釉薬が変化して黒いうつわの中で星のような斑紋が生じるさまは宇宙に見立てられ、日本の権力者らがこぞって手に入れようとした（所蔵＝藤田美術館）





左／迎えに従い、かぐや姫（図右上）が地上を去って月へと帰っていく場面『竹取物語絵巻』（所蔵＝国立国会図書館）
下／キトラ古墳の天文図。350以上もの星に加え、天の赤道や黄道（太陽の通り道）にあたる丸まで描かれている（キトラ古墳壁画 5面。国【文部科学省所管】）



日本人の宇宙観

古来、日本人は宇宙を自然の延長と捉え、物語や歌、詩を通じて親しんできた。独特の宇宙観は、宇宙開発にも反映されている。

すぐ近くにある月世界

9世紀頃に成立した日本最古の物語文学『竹取物語』は、月を舞台としている。月から来たかぐや姫が地上で大人へと成長し、その美しさを見そめた帝の求婚から逃れ、再び月へ帰るという月世界の永遠と地上の無常を描くストーリーだ。また、11世紀に成立した『狭衣物語』には、月から降りてきた神が天皇の前で笛を吹く狭衣中將のもとを訪れるエピソードがある。月からの来訪者が描かれるふたつの物語から、天体とは遠く隔絶されているものではなく、地上世界とごく近いところにあるのだと日本人が感覚していたと窺い知れる。

宇宙は自然の延長にある

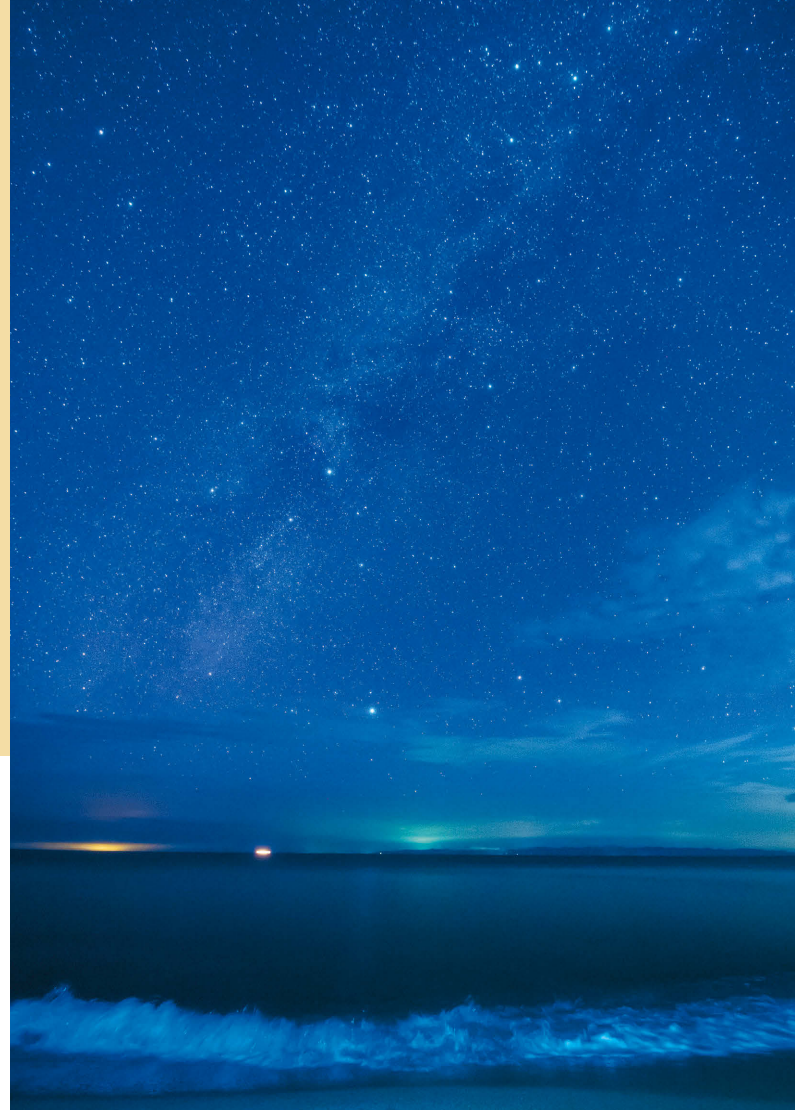
日本古来の宗教である神道には、山や海、川、木など万物に神が宿るという「八百万の神」思想がある。農耕を主として生活していた日本人にとって、恵みとともに脅威をも与える自然は、畏怖するだけでなく敬いの対象でもあった。ゆえに天体も八百万の神のひとつと捉

えられ、太陽は「天照大神」、月は「月読命」として神格化された。これらは神々の中でも別格の存在とはいえ、人間の生活に多大な影響を与える神として描かれた。つまり、天体の神も地上の神々と本質的には変わりはなく、宇宙は自然の延長上にあると考えられていたのである。

こうした日本人の宇宙観は、歌や詩の中にも表れている。7～8世紀に編まれた日本最古の歌集『万葉集』には、月を詠んだ歌が100首以上もある。山や川、草花に自らの心情を託すように、月もまた自然と同じように歌のなかに詠まれたのだ。江戸時代（1603～1868）の俳人・松尾芭蕉は、「荒海や佐渡によこたふ天の河」という句を詠んだ。荒々しい日本海に浮かぶ佐渡島と、上空に広がる天の川の情景の美しさを並び立てて詠んだ当句には、天体と自然を一体のものとして見る日本人の感性が宿っているのではなかろうか。

日本における宇宙観測の歩み

だが、日本人は単に自然としての宇宙を愛でいただ



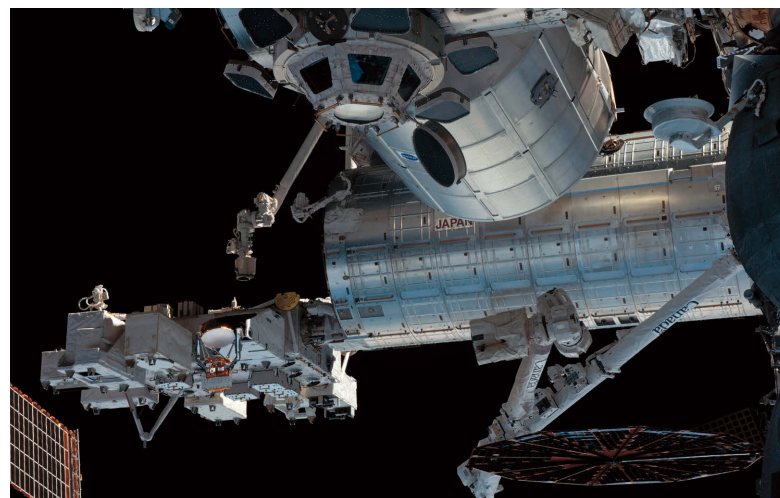
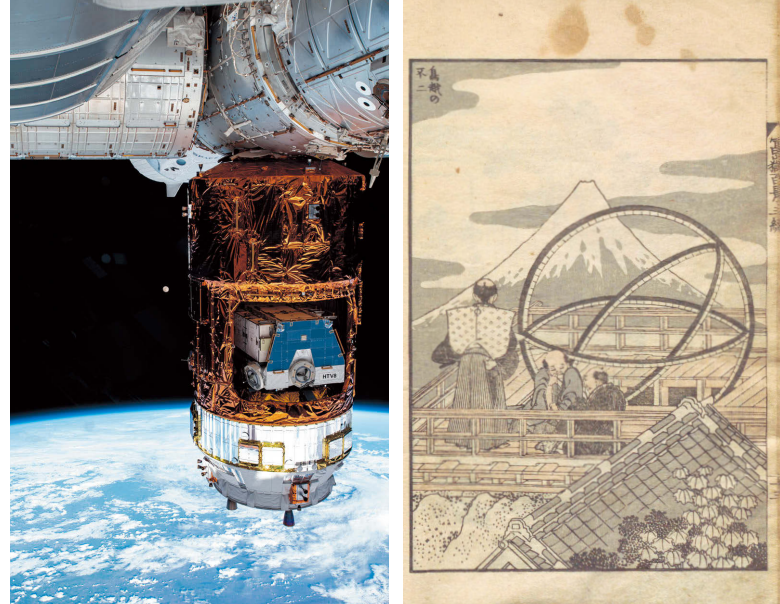
左／松尾芭蕉が俳句に詠んだ、佐渡島の上空に架かる天の川（写真＝Aflo）
中上／ISSに結合し物資の補給を行う「こうのとり」9号機（画像提供＝JAXA/NASA）
右上／富士山を背景に、渾天儀（こんてんぎ）を据えた浅草天文台（1782年設立）が描かれた浮世絵『富嶽百景 鳥越の不二』（所蔵＝国立国会図書館）
右下／ISSの実験モジュール「きぼう」（画像提供＝JAXA/NASA）

けではない。7世紀頃には天文台がつくられ、日食や月食、彗星の出現から吉凶を占い、太陽の運行や月の満ち欠けを基にした暦が制定された。7世紀後半から8世紀に描かれたとされるキトラ古墳の壁画には、世界最古の天文図のひとつが残り、当時の人びとが正確な知識とともに天体を観測していたことが窺える。17世紀に西洋の知識が流入したことで、望遠鏡や渾天儀（天体観測用の器具）を用いた研究がさらに進展し、近代天文学の礎が築かれた。

共存・調和の宇宙開発へ

現在、独自開発した「H3ロケット」の打ち上げ成功や小型衛星の運用などで、日本は宇宙開発先進国のひとつとして世界を牽引する。特徴的なのは、技術開発を競争とばかり捉えるのではなく、各国と協力して宇宙を平和的に活用し持続可能な場にすることを重視している点だ。

たとえば、世界の5つの国際機関が参画する多国籍 共



同プロジェクト「国際宇宙ステーション（ISS）」が挙げられる。日本が開発した「きぼう」モジュールが研究拠点として重要な役割を果たし、無人補給機「こうのとり（HTV）」が物資補給ミッションを担うなど、このプロジェクトの根幹を支える機能を担い、多くの国から高い評価を受けている。

また、宇宙ゴミの除去をめざす民間企業のプロジェクトは、宇宙を持続可能な場として保っていくための日本独自の取り組みだ。さらには、宇宙開発途上国への技術支援なども積極的に行われている。

古来、自然と一体のものとして宇宙を見てきた日本人の宇宙観は、宇宙を開拓の場としてではなく、世界のひとびととの新たな「共生の場」として考えようとする日本の姿勢によく表れているといえよう。

監修＝二間瀬敏史
1953年生まれ。東北大学名誉教授。専門は宇宙物理学。著書に『日本人と宇宙』『基礎から学ぶ宇宙の科学——現代天文学への招待』などがある。

宇宙に貢献する日本の技術

宇宙空間の平和利用に貢献してきた日本の宇宙開発技術は発展を続け、さらに宇宙ゴミや気候変動など地球規模の課題にも挑んでいる。



1／デブリ（右）に接近し、近距離で観測を行う衛星「ADRAS-J」のイメージCG 2／「ADRAS-J」開発時のようす（2点とも写真＝株式会社アストロスケール）

宇宙のクリーン作戦を準備中

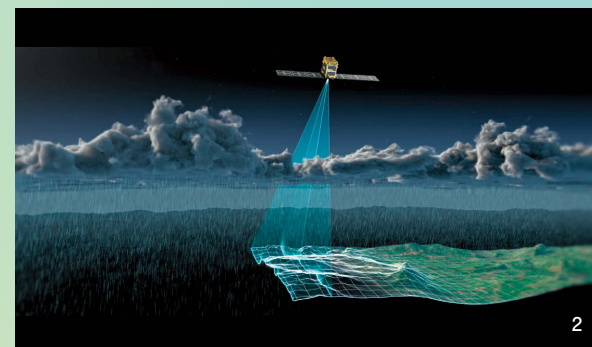
役目を終えた人工衛星やロケットの破片といった宇宙ゴミ（デブリ）は、地球の周回軌道に1億個以上あるとされ、衛星や宇宙ステーションに衝突すれば甚大な被害をもたらす。宇宙開発の妨げとなるこのデブリを除去しようという、世界でも珍しい取り組みを進めるのが、株式会社アストロスケールだ。2024年に打ち上げ

た衛星「ADRAS-J」では、秒速7～8kmという超高速で移動するデブリに、安全に接近。当初は相対的に数千kmの距離があったが、その距離を15mにまで縮めることなどに成功している。次なる目標は対象の捕獲で、全長11mほどある大型デブリを除去する衛星「ADRAS-J2」の開発が進められている。

小型衛星の解析データで気候変動などの地球課題を解決

マイクロ波を使い地表面のようすを観測するSAR（Synthetic Aperture Radar：合成開口レーダー）衛星。天候や時間を問わず、広い範囲を高解像度で観測できるため、近年は災害規模を調べたり、地盤や気候変動のリスクをはかったりする場面で活用されている。

なかでも株式会社 Synspective（シンスペクティブ）は、従来大型衛星の約10分の1まで軽くした小型SAR衛星を安価で量産する技術を開発。展開すれば大型衛星並みに長い折り畳み式のアンテナや、1kW級のアンプを搭載し、優れた熱制御機能により衛星が許容できる温度範囲を保つことで、軌道上でも故障しにくい。衛星コンステレーション（多数の人工衛星を同じ軌道に打ち上げ、協調的に動作させることで、同時に広範囲の通信・観測を行うシステム）の構築により、地球全体を準リアルタイムで観測できるシステムづくりに取り組んでいる。国内では地震や洪水の被害データを政府などに提供する実績をつくり、海外でも多数の地盤沈下の被害を予見。アジアや北米にも進出しており、その土地ならではの課題解決に挑んでいく予定だ。



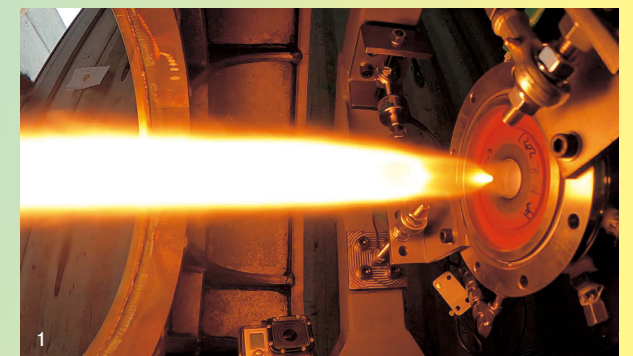
1／大型衛星の約1/10で100kg級と軽い小型SAR衛星「StriX（ストリクス）」。

2020年代後半には30機のSAR衛星コンステレーションを確立させる 2／小型SAR衛星の観測イメージCG。衛星から発信し地表面で反射させて受信するマイクロ波は雲を透過し、天候や昼夜を問わずデータが取れる 3／小型SAR衛星の災害対策活用について、カザフスタンと覚書を交わすSynspective社のジェネラルマネージャー（左）写真3点とも©Synspective Inc.

アジアの宇宙開発と人づくりを牽引

日本の北の大地に位置する北海道大学は、ロケットなどの機器開発を行う工学系と、衛星搭載用光学機器の開発を行う理学系の研究者および衛星や探査機の観測データを解析する理学・農学・水産学系の研究者が切磋琢磨し合う、世界でもまれな大学である。学内には企業や近隣大学と連携しながらさまざまな宇宙ミッションに取り組む北海道大学総合イノベーション創発機構・宇宙ミッションセンターがあり、小型人工衛星向けのエンジンシステムや50kg級の超小型衛星といった新しい技術が次々に生み出されている。

2015年からはフィリピンと共同で同国初の人工衛星を開発し、フィリピン宇宙庁（PhilSA）の立ち上げのきっかけをつくった。取り組みはほかの東南アジア諸国へも広がり、北海道大学および東北大学を中心に、アジア9か国が参加する「アジア・マイクロサテライト・コンソーシアム」が設立された。北の大地にアジアの宇宙開発ネットワークの拠点が形づくられている。

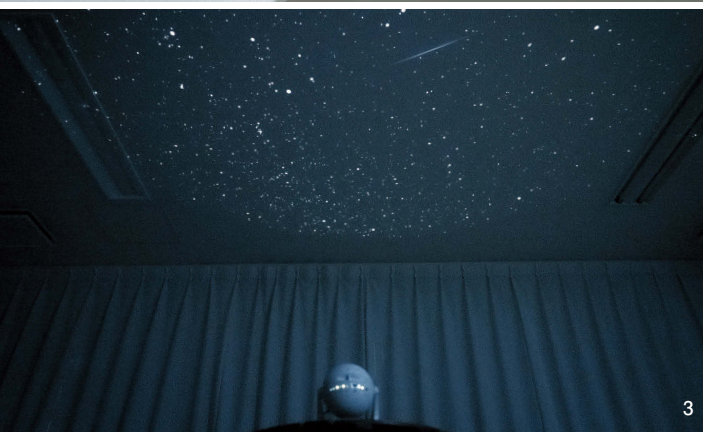
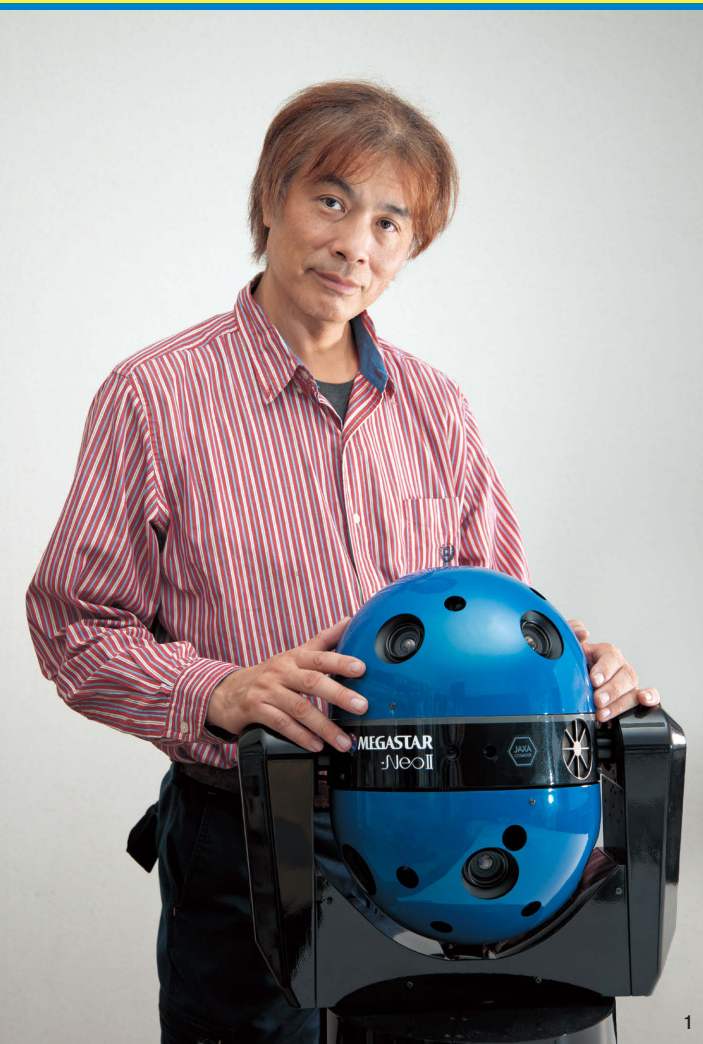


1／北海道大学宇宙環境システム工学研究室で開発された小型人工衛星用のハイブリッドキックモーター。複数の小型衛星をひとつのロケットに相乗りさせて打ち上げ、各衛星を目的の軌道に乗せるのに役立つ（写真＝北海道大学宇宙環境システム工学研究室） 2／東南アジア各国から来た若者たちが集う研究室（写真＝北海道大学/東北大学）

宇宙をつくる人びと

星空を再現し、人工的に流れ星を生じさせる。
日本の技術者たちの挑戦がつくりだす、新しい宇宙のかたち。

写真●古里麻衣



満天の星をつくりだす、 プラネタリウム・クリエイター

ドーム状の天井のスクリーンに星像を映し出すことによって、夜空を表現するプラネタリウム。その中でも恒星原板とレンズを用いることでより高精細の星像を映せる光学式プラネタリウムを用いて、革新的な表現をつくり出しているのが、プラネタリウム・クリエイターの大平貴之さんだ。

1998年、大平さんは従来の100倍以上に相当する170万個もの恒星を投影する「MEGASTAR」を発表。天の川の無数の星の一つひとつを映し出すことに成功し、世界を驚かせた。以降も改良を重ねた後継機で投影する星の数を増やした。さらに2015年には12億個もの星を映し出すことができる超精密恒星原板「GIGAMASK」を開発。原板に開けた最小の穴は直径180nm（10万分の18mm）という極微細なものだ。

「人間の目で夜空に見える星はほんの一部に過ぎませんが、実際には無数の星が宇宙空間に輝いており、それをプラネタリウムで垣間見ることができます。そうやって、宇宙の無限の広がりを感じてほしい」

大平さんは、「MEGASTAR」の技術を応用した家庭用光学式プラネタリウム「HOMESTAR」も開発。自宅で気軽に満天の星を楽しめるとあって多くの国で人気を集めている。「プラネタリウムをきっかけに宇宙に興味をもつ子どもが増えたらいい。そのなかから、いつか宇宙に出て、未知の生命体を見つける人が出てきたら嬉しいですね」

1/最新の小型機「MEGASTAR-Neo II」を手にする大平さん 2/超精密恒星原板「GIGAMASK」のうちの1枚。星の多いエリアで1枚あたり約2億〜3億個の星が再現された原板を32枚使い、約12億個の星を映す（写真＝有限会社大平技研） 3/家庭用光学式プラネタリウム「HOMESTAR」シリーズ。2021年には「星が瞬く」機能を搭載し、よりリアルな星空を自宅でも楽しめるようになった（写真＝株式会社セガ フェイブ）



世界初の挑戦 人工の流れ星を降らせる

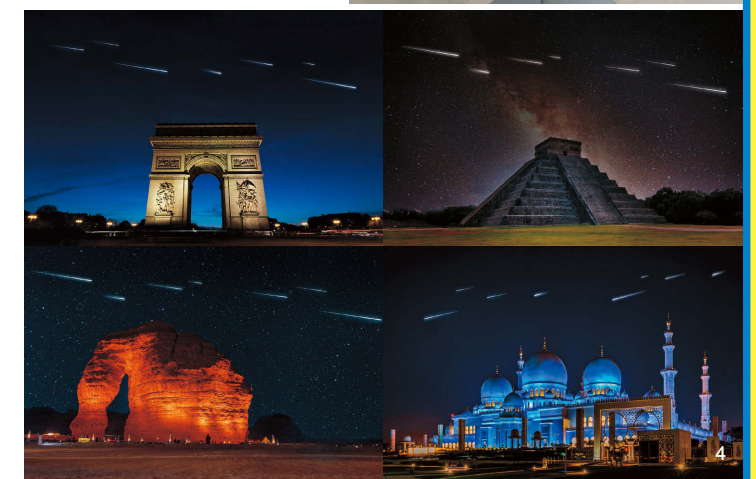
「望んだ場所や時間に、人工的に流れ星を降らせてみたい」。大学生の時にしし座流星群を目にして生まれたひらめきからはじまった、世界でも例のない事業に挑戦するのが、ALE（エール）の代表岡島礼奈さんだ。

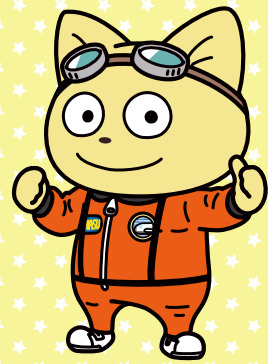
人工の流れ星の素になるのは、「流星源」と呼ばれる直径約1cmの金属の粒だ。流星源は人工衛星から地球に向けて放出され、大気圏に突入して断熱圧縮で高温になって燃え尽きる。するとその姿は、地上からは流れ星のように見えるのだ。「原理は、宇宙の塵が大気圏で燃えるようすを観測する実際の流れ星と同じです。でも、私たちのつくる流れ星のほうが都会の空でもはっきりと目立つほど明るく、時間も長く眺められるんですよ」。今後、空を彩る新しいエンターテインメントとして、さまざまな場面での活用が期待されるほか、人工流れ星を放出する際に集めた大気データを蓄積し、気候変動の解析にも役立てられることが期待される。

「宇宙を文化圏にしたい」と語る岡島さんの見渡す未来はどこまでも広く、明るい。



1/ALEが打ち上げた人工衛星の模型とならぶ、岡島さん 2/衛星の機能を実験する岡島さん。衛星の制御や電力供給などは、地上からの指示で管理される 3/衛星に搭載される「ミッション部」。ここから「流星源」（写真上）が放出される 4/人工の流れ星を降らせた際の想像図（写真＝株式会社ALE）



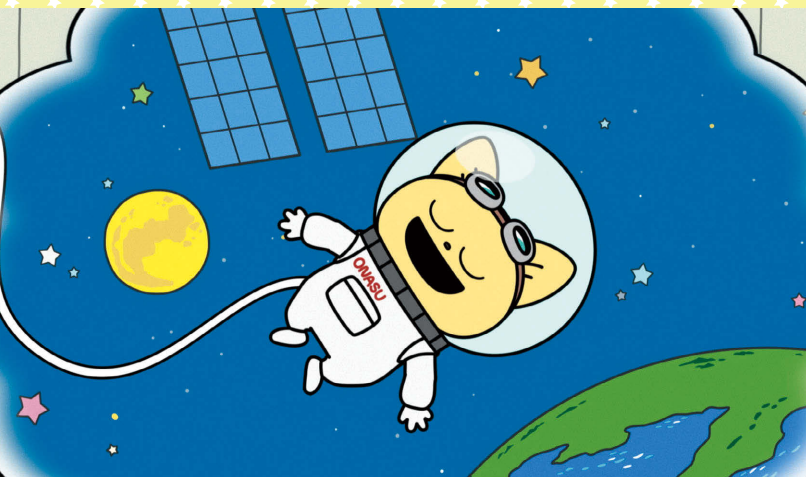
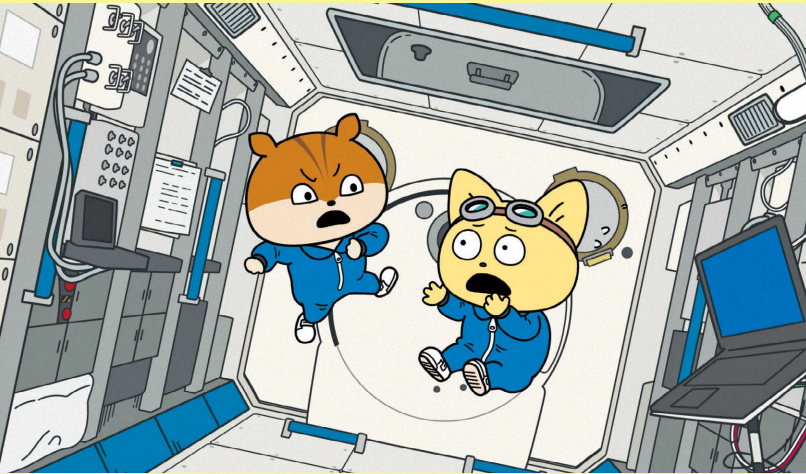


宇宙アニメが好き！

壮大な宇宙を舞台に、

さまざまなキャラクターが描かれる日本の宇宙アニメ。

子どもたちに宇宙への夢と憧れを与えてきた作品たちにふれてみよう。



宇宙兄弟

30歳を超えてから宇宙飛行士を目指す兄・南波六太と、一足先に夢を叶えて月面に降り立つ弟・日々人。ふたりの努力や挫折を中心に、宇宙へ挑む仲間たちとの奮闘を描く。宇宙航空研究開発機構（JAXA）をはじめとした実在の宇宙開発機関も登場し、昨今のリアルな宇宙開発事情を丁寧に描写。宇宙開発に携わる人びともファンが多い。

©小山宙哉・講談社／読売テレビ・A-1 Pictures



宇宙なんちゃら こてつくん

宇宙飛行士を目指して「宇宙アカデミー」に入学した“こてつくん”が、ロケットの開発者や宇宙食の料理人など、個性豊かな夢を持つ仲間たちと学んでいく姿を描く。個性あふれるキャラクターたちのコミカルなやりとりを楽しみながら、「宇宙はどうやって誕生したの?」「宇宙に匂いはあるの?」といった素朴な疑問にわかりやすく答えられる。

©Space Academy／ちょっくら月まで委員会2



銀河鉄道999

松本零士のマンガを原作に、1978～1981年に制作されたSF作品。永遠の命を得られる機械の体をもとめ、謎めいた女性・メーテルとともに宇宙列車「999号」に乗りこんだ少年・星野鉄郎の冒険を描く。停車駅となる惑星で出会う人びとや生命体との関わりを通して、人間の愚かさや弱さ、生命の尊さが紡がれる。実在の蒸気機関車をモデルとした999号が、汽笛を鳴らして銀河を駆けめぐる姿は、多くの人びとを魅了した。

©松本零士／零時社・東映アニメーション



地球外少年少女

宇宙旅行が当たり前になった2045年が舞台の作品。大規模な事故により宇宙ホテルに取り残された5人の子どもたちが、次々と襲いかかる困難を乗り越え、自力での脱出を目指す。宇宙という極限環境での危機的状況を緊迫感たっぷりに表現する一方、コンビニエンスストアやインターネットが完備された宇宙生活や、AIとの共存に慣れ親しんだ人びとの姿がありありと描かれ、現実味のある未来像として表現されている。

©MITSUO ISO／avex pictures・地球外少年少女製作委員会



とっとり
鳥取

だいせん
大山

県内各地で美しい星空が見られる鳥取県は、「星取県」の別名がある。特に、西部にそびえる標高1729mの大山は、絶好の天体観測スポット。季節や時間によって移り変わる星空や、肉眼でもはっきりと見える天の川を背景に、記念撮影をしてみよう(写真=大山観光局主催「大山星空で遊ぶツアー」)



にっぽん
地図めぐり



ふくおか
福岡

ふくおか し か がくかん
福岡市科学館

光学式とデジタル式を組み合わせた世界最高水準のプラネタリウム投射機から、直径25mのドームスクリーンに映し出される星空は迫力満点。2026年開催のプラネタリウム国際会議の会場に選定され、世界的にも注目が集まっている(写真=福岡市科学館)



日本各地の宇宙スポット

はくりよくまんてん ほしぞら なが
迫力満点の星空を眺めたり、
うちゅう ひ こう し
宇宙飛行士になって無重力を味わったり。
かなた ひろ うちゅう
はるか彼方に広がる宇宙が、ぐっと身近に感じられる。



いしかわ
石川

うちゅう か がくはくぶつかん
宇宙科学博物館
はくい
コスモアイル羽咋

空飛ぶ円盤のような外観が特徴的な建物に足を踏み入ると、実際に宇宙から帰還した宇宙船や探査機を目にすることができる。なかでも、日本初の実用ロケットエンジン「LE-5」は必見だ(写真=宇宙科学博物館コスモアイル羽咋)



ほっかいどう
北海道

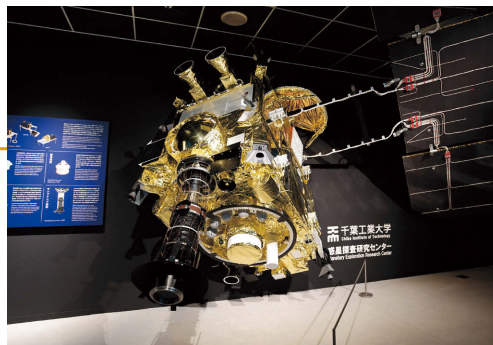
あさひかわ し か がくかん
旭川市科学館 サイバル

体験型の展示機器が揃う科学館で、無重力状態を体感できる「宇宙ゴマ」(写真)や、月面の重力を疑似体験する「ムーンジャンプ」で、宇宙飛行士の気分を存分に味わいたい(写真=旭川市科学館 サイバル)

いはらぎ
茨城

JAXA
つくば うちゅう
筑波宇宙センター

1972年に開設された、日本の宇宙開発事業を担うJAXAの中核拠点。約53万㎡の広大な敷地に、ロケットや人工衛星の開発・運用を行う施設が集結する。純国産ロケット「H-II」の試験用機体(写真)や、日本初の月探査衛星「かぐや」の実物大の模型を見ることができる(©JAXA)



とうきょう
東京

ち ば こうぎょうだいがく
千葉工業大学
とうきょう
東京スカイツリータウン®キャンパス

高さ634mを誇る「東京スカイツリー」に隣接するソラマチ8階にある、ロボットと宇宙関連の先進的な学びの拠点。最先端の技術展示や研究成果を楽しめる体験型施設として一般に開放されている。写真は「はやぶさ2」の実物大模型の展示(写真=千葉工業大学東京スカイツリータウン®キャンパス)



ぎふ
岐阜

うちゅう か がくかん
ひだ宇宙科学館
かみおかラボ

宇宙から飛来する原子よりはるかに小さい素粒子「ニュートリノ」。その観測装置「スーパーカミオカンデ」の大型模型が展示されている。現物と同じ材料を用いて忠実に再現された壁一面の模型に目を奪われる(写真=ひだ宇宙科学館 カミオカラボ)

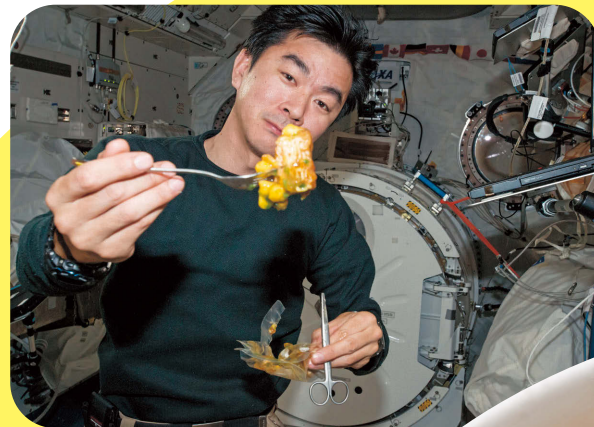


召し上げれ、
日本

27

宇宙日本食

地球上の味を
宇宙で楽しむ



微小重力環境でも食べやすく
工夫されたしょう油ラーメン
(右)を味わう日本人宇宙飛
行士の油井亀美也さん(画像
提供= JAXA/NASA)



カップ焼きそば「日清焼きそ
ばU.F.O.」はお湯を吸い切ら
せて仕上げる(©JAXA)



福井県のサバを使って開発さ
れた缶詰。しょう油で味が
付けられ、食感もやわらか
(©JAXA)



(©JAXA)

コンビニエンスストアの定番商品を宇
宙仕様にした「スペースからあげク
ン」。フリーズドライ化して揚げたて
の食感を保つ(©JAXA)



宇宙で生きていくために欠かせない宇宙食。有人宇宙飛行開始当初の1960年代、固形食やチューブ入りの流動食ばかりで味の評価は芳しくなかったという宇宙食は、半世紀以上の時をへて大きな変遷を遂げている。

その発展に貢献したのが、1998年から世界15か国が参画して運用されている国際宇宙ステーション(ISS)である。船内ではアメリカとロシアが提供する「標準食」をメインに、宇宙飛行士が自国の料理

を持ち込める「ボーナス食」を合わせた食生活が組み立てられている。日本人宇宙飛行士の場合は、国内の食品メーカーが開発し、宇宙航空研究開発機構(JAXA)が独自に認証した「宇宙日本食」からボーナス食を選択する。衛生管理を徹底した設備や、微小重力環境で破裂・飛散しない包装や調理法を定めた厳しい認証基準を満たすことに加え、おいしさが必須条件であるのはいうまでもない。

もともと食品の加工技術や衛生管

理の質が高い日本では、各地の食品メーカーの参画により、2025年3月現在、認証された数は56品目までに増えた。なかには、福井県の高校生らが14年の年月をかけて開発したサバの缶詰もある。

1958年に世界で初めて即席麺を発明した老舗メーカーは、微小重力環境でも食べやすいよう、粘度の高いスープと、湯で戻したあとも形がくずれない塊状の麺に仕上げたラーメンを開発。また大手コンビニエンスストアの定番商品である鶏

のから揚げは、フリーズドライ製法が施され、サクサクの食感はそのまに宇宙仕様へと生まれ変わった。主食からおかず、菓子、飲料まで、メニューはどれも日本の食文化を反映し、カレーやおにぎり、焼きそば、煮込みハンバーグといった、ふだん家庭で食べられているような飾らない味が多いのが特徴的だ。

地上を離れた極限空間での暮らしに、ひとときのくつろぎを与えてくれる健康的でおいしい宇宙日本食は、海外のクルーにも人気が高い。

果物や野菜も宇宙に届けられる。写真は、無人補給機「こうのとり」6号機によってISSに届けられた日本のりんご(画像提供= JAXA/NASA)





う ちゅう みなみ しま
宇宙とつながる南の島

た ね が し ま 種子島

み わた かぎ す き うみ そら
見渡す限りの澄み切った海と空。
ゆた たね し ぜん たね が し ま
豊かな自然あふれる種子島で、
そうだい うちゅう おも は
壮大な宇宙へ想いを馳せる。



1/「種子島宇宙センター」から打ち上げられるH3ロケット(©JAXA) 2/恵美之江展望公園で打ち上げを見守る見学者たち(写真=種子島観光協会) 3, 4/「種子島宇宙センター」内にある「宇宙科学技術館」では、宇宙開発の歴史や最新技術を楽しみながら学ぶことができる。宇宙ステーションでの無重力の空間にいるように見える撮影スポットも用意されている(©JAXA) 5/種子島宇宙センター食堂「宙飯屋」の名物「ロケットカレー」





6



7



8



9

6, 7 / 鉄砲伝来を記念して開催される「鉄砲まつり」(写真＝種子島観光協会・種子島火縄銃保存会)
8, 9 / 「種子鋏(たねばさみ)」には、鍛冶職人の手で一つひとつ作られる(写真＝8 種子島開発総合センター鉄砲館、9 株式会社 MATHERuBA)



13



14



15

13 / マングローブのトンネルをくぐるように進むカヤック探検は、人気のアクティビティのひとつ(写真＝種子島 観光 BLUE PEACE) 14 / 太平洋の荒波に洗われてきた、種子島最大の海蝕洞窟「千座の岩屋」(写真＝PIXTA) 15 / 遠浅の美しい海に潜れば、南国ならではの魚たちに出会える(写真＝Dive Award)

日本列島の南、鹿児島県の南方沖に浮かぶ種子島は、鹿児島空港から飛行機で約40分。高速船に乗れば、約1時間30分でたどり着く。温暖な気候と雄大な自然に恵まれたこの島には、日本の宇宙開発の最前線基地「種子島宇宙センター」がある。

轟音と閃光に包まれながら、群青の海を背景に空へと飛翔するロケットをひと目見ようと、打ち上げの日には全国から見学者が集う。世界一美しいと謳われるこのロケット発射場を備えた宇宙センターが日本の南につくられたのには理由がある。ロケットを東向きに打ち上げる

場合、地球の自転の運動エネルギーがロケットのスピードに加算される。赤道に近く自転速度が速い場所ほどロケットに伝わる力が大きくなるため、北緯30度と比較的赤道に近く、広大な土地を有する種子島が、日本の宇宙の玄関口に選ばれたのだ。

歴史を振り返れば、種子島が一躍、日本史の表舞台に躍り出たできごとがあった。16世紀、この島に漂着したポルトガル人から鉄砲が伝来し、戦国時代の日本に大きな影響を与えたのである。それを記念し、当時の装束に身を包んだ人びとが試射などを行う「鉄砲まつり」は

今なお毎年開催されている。鉄砲とともに伝わった「種子鋏」は、支点が持ち手と刃の中間に位置する中間支点式の鋏。切れ味が鋭く、利き手を選ばない利便性のよさから、やがて種子島を代表する伝統工芸品となった。17世紀には、大陸から伝わったサツマイモの栽培が始められた。近年は糖度が高く、ねっとりとした食感が特徴の品種「安納芋」に改良され、その濃厚な甘さを利用したスイーツが名物になっている。

種子島を存分に堪能したいなら、大自然にも目を向けてほしい。日本本土では珍しい亜熱帯植物の生息域で

あり、川沿いの各所にはマングローブ林が広がっている。カヤックに乗って水辺を進みながら、原生林の美しさを感じてみたい。さらに海岸には、波の浸食作用で形成された岩場がエメラルド色の海と調和し、美しい景観を形づくっている。そんな海で楽しむマリンスポーツは格別だ。ひとたび海中へと潜れば、色鮮やかな熱帯魚とサンゴ礁に彩られた華やかな世界に魅了される。

空と海に向かって開かれたこの島でなら、ゆったりと流れるだらかな時間に身をゆだね、大地の恵みと宇宙の存在に思いを馳せる特別な旅ができるだろう。



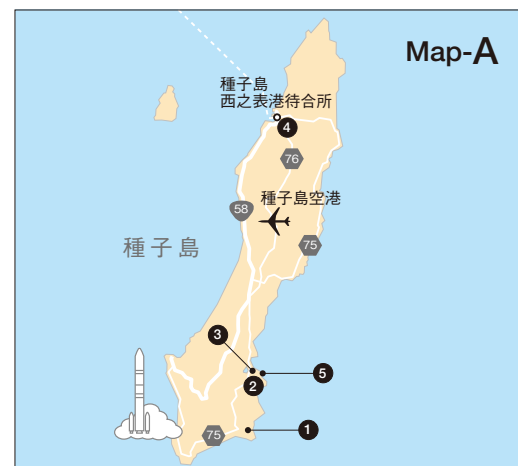
10

10 / 濃厚な甘みとねっとりとした口当たりが絶品の「安納芋」(写真＝PIXTA)
11 / 「種子島ジェラートHOPE」の、安納芋を使ったジェラート
12 / 「菓子処酒井屋」の、安納芋のあんを用いたパイ生地のお菓子



11

12



種子島エリア地図

- ① JAXA 種子島宇宙センター
- ② 恵美之江展望公園
- ③ 種子島ジェラートHOPE
- ④ 菓子処酒井屋
- ⑤ 千座の岩屋

●交通案内
鹿児島空港から種子島空港まで、飛行機を利用して約40分。
鹿児島本港南埠頭から西之表港まで、高速船で約1時間30分。

●問い合わせ
種子島観光協会ウェブサイト
[#tanetabi]
<https://tanekan.jp/>

ニッポン

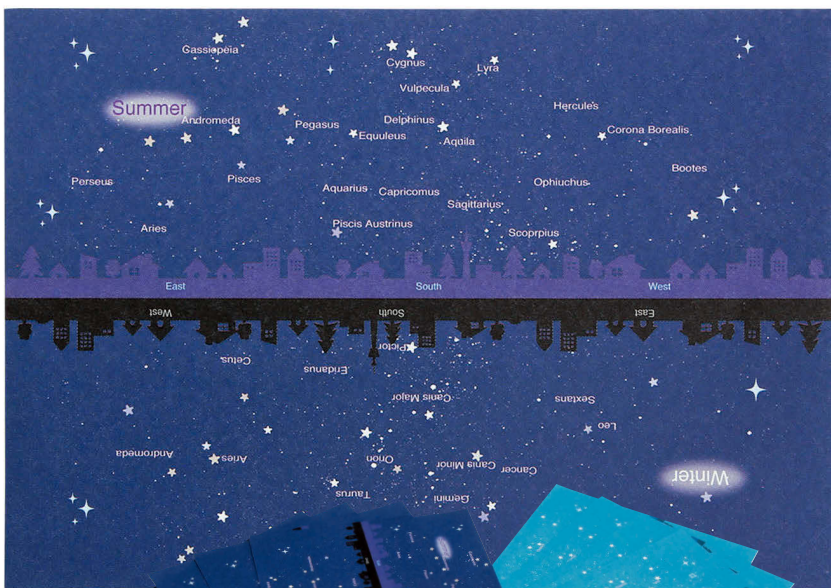


みやげ — 29



きじょう ひろ むげん せかい
机上に広がる無限の世界

宇宙文具



1/地球や月、木星、土星などをガラスに閉じ込めたような、立体のマグネット (写真=株式会社ラスタックス) 2/窓付きの封筒から、便箋の星空柄が覗くレターセット (写真=株式会社ビクセン) 3/宇宙船のロケット切り離しをイメージしたステープラー (写真=セトクラフト株式会社) 4/和紙素材にたくさんの星や月が描かれたマスキングテープ (写真=LALA CloverR.) 5/H3ロケットをかたどったボールペン (写真=株式会社ビー・シー・シー)

壮大な宇宙の魅力を机上で楽しむことができるのが、宇宙をモチーフにした文具たちだ。

たとえば、金銀の星や月が散りばめられた絵柄のマスキングテープは、引き出すたびに星空が広がる幻想的な一品。手紙や手帳の装飾に彩りを添えてくれる。星空のレターセットは、便箋を封筒に収めると、天体観測をしているようなデザインに。受け取った相手も、夜空を見上げてみたくなること間違いなしだ。また、惑星をかたどったマグネットも冷蔵

庫やホワイトボードなどに好きなように配置すれば、自分だけの宇宙ができあがる。

宇宙開発を題材にした文具は、日本の大型ロケットH3を模したボールペンに開発中の新型宇宙ステーション補給機HTV-Xのマスコットが寄り添う。机にあるだけで目立つ宇宙船型のステープラーがあれば、単調な作業にも意欲的に取り組めそう。

機能性のなかに遊び心を加えた宇宙文具を集めて、机上で宇宙気分を味わいたい。

niponica

にぽにか no.38

(日本語版)

発行/日本国外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関 2-2-1

<https://www.mofa.go.jp/> (外務省ホームページ)

<https://web-japan.org/> (日本紹介ウェブサイト)

